

死ぬことと生きること

—サン=テグジュペリ『戦う操縦士』と武士道—

川崎医療短期大学 一般教養

安井 信子

(平成18年9月29日受理)

Dying and Living : *Pilote de Guerre* by Saint-Exupéry and Bushido

Nobuko YASUI

Department of General Education,

Kawasaki College of Allied Health Professions,

316 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0194, Japan

(Received on September 29, 2006)

概 要

サン=テグジュペリの戦争体験は、保護された安全な領域から出て危険に晒され、やがて死に直面するという点において、すべての人に当てはまる。そのとき彼が発見したことは、人間の本質が人との絆、つながり、愛であること、そして人はそのために生きそして死に得るものである、ということであった。それは、個人を超え私心を去るという意味において武士道と合い通じるものがある。彼の生きる姿勢は武士道本来の価値を浮き上がらせてくれる。キーワード: 広がり, 絆, 真人間, 常住死身, 私心を去る

Abstract

Saint-Exupéry's experience in the war has something common to everyone in that he left the protected and safe childhood to be exposed to danger and death. What he found then was that the essence of humans is relation and love and that man can die for its sake. It is quite similar to Bushido in some ways. His life makes the essential value of Bushido clear, which is to overcome ego and contribute to others. Key words : étendue, relation, l'Homme, spiritual preparation, selflessness

はじめに

日本でも人気のある『星の王子様』は、愛する花の仕打ちに傷ついた王子が、自分の小さな星を旅立って地球で様々な体験をし、より深い愛に目覚めて星に帰っていく童話風の物語である。それを書いた頃、サン=テグジュペリ（以下サンテクスと呼ぶ）は体験に基づいた極めて現実的な大人の物語、『戦う操縦士』を書いていた。その主人公もまた出立して強烈な経験を経て戻るのが、作者自らの戦争体験であるだけにはるかに苛酷でリアルである。第二次世界大戦のさなか、彼は仏軍偵察飛行部隊所属の搭乗員として、生還の望みの殆どない任務を帯び

て飛び立つ。奇跡的に死を免れて帰還した彼が、命を懸けて得たものは何か。それは現代の私たちに何を伝えてくれるのか。

1. 庇護の外へ

本書には繰り返し出現するテーマがある。それは安全で快適な場所から危険な所に出ていくというテーマである。まず、冒頭に登場するサンテクスは夢を見ていて、夢の中では十六歳で、コレージ（専門学校）にいる。そこは日光が快く当たる、友愛に満ちた楽しい場所であり、「保護の行き届いた子供時代」（P5）（以下傍点筆者）である。その幸福に浸る彼は、一方では皆いつかは出て行くことを知っていて、それを「孵卵器の温暖な平和」と呼んでいる。卵がいずれ孵って雛となりやがて飛び立つように、「遊びのときは終わった」生徒たちはそれぞれに「世界を建設するために、あるいは敵手に打ち勝つために」、コレージを去って世の中に、「中国よりももっと遠方へ」、「二度と会えないかもしれない」（P7）遠い所へと出て行く。事実、夢から覚めればときは第二次世界大戦の只中、彼は「超低空で敵陣地アラスを偵察」という「犠牲的任務」へと呼び出されるのだ。しかも仏軍は敗北と混乱のさなかにあって、彼の任務も作戦上全く無駄であり、己の死も無意味となる状況にいる自分を、彼は「天龍に見捨てられたキリスト教徒に似ている」とか、「神が身を引いてしまったとき」に役目だけは果たすようなものだとして述べる。（P17）これは保護された子供時代から死の危険への出発を示す最初のシーンである。

第二は、離陸後の飛行機の中での経験である。一旦操縦を始めると、彼はその操作に専心し、「成熟する果実のように」、「遊んでいる子供のよう」に懊悩のない存在となる。「僕は、機全体に伸び広がった（étendu）一個の組織体だ。」「機体から哺乳されて、一種子の親に対するような愛着を感じる。」（P37）それは機体に支えられているという「幼児のような愛着」である。出発前の不安や恐怖は薄れ、「自分の実行の寸法」に沿って「自分の職務を遂行している」という満足感に取って代わる。彼は愛機と一体化し、日常馴染んだ操縦操作に一時的な心の安定を得るのだ。しかし「戦闘機左前方！」の言葉が雷鳴のように鳴り響くとそんな安定は吹っ飛んで、そのとき彼はひたすら「自分が誰のために死ぬのか知っておきたい」（P48）と痛感する。幸い銃撃の危機は逃れたが、凍結した操縦桿に体力を使いすぎた彼は、心臓の不調を起こして失神しかけた。危機一発で意識を取り戻した彼はこの墜落死の危機を同乗者には告げなかった。ここにも、親に守られる子供のような安心から、否応なく死の危険に晒されていくという動線がある。

第三は、「真の冒険」について彼が語る印象深い場面である。彼は言う、「かつて僕は冒険を体験してきた、航空郵便路の開設、サハラ砂漠横断の長距離飛行、南米空路の開拓…等。ところが…（中略）戦争は冒険ではない、戦争は病気的一种だ。」（P68）戦争で経験した唯一の冒険は、1939年の冬、所属の隊が舎営したオルコント村での朝の目覚めだったと彼は言う。煉土壁の農家は夜には水瓶の水が凍るほど寒さが厳しかったので、朝目が覚めると先ず暖かいベッドから出て、薪に火をつけてベッドに戻り、炎が立つのを待ち再度炉のところまで行くのだが、

ベッドから出るには一大決心を要した。なぜなら「昼間は高空の鋭い敵弾に曝され」、肉体が「戦争のための付属品の倉庫」と化している状況にあっては、「この空っぽな凍りつきそうな部屋の質素なベッド」は「世の中で最も素晴らしいもの」、「休養の至福を味わい」、「安全感を楽しむ」場所である。このベッドから「肉体を引き出して凍りそうな水で洗い、髭をそり、着衣させ」れば、それは敵弾の「鉄の破片の前に肉体をさらけ出すため」だった。「この離床は母の腕から、母の乳房から、引き離される時のあの気持ちに、幼いころの小児の肉体を可愛がり、愛撫し、保護してくれる一切のものから引き離される時のあの気持ちに似ていた」のだ。(P70)

意を決して歯を食いしばってベッドを飛び出し、炉に点火すると部屋を横切りベッドに戻り、火が燃え上がるのを見守る。その火は「準備の成った祝祭のように」楽しく歌いだす。彼には「この優しい火に護られていることが、忠実で敏捷な、よく働く牧羊犬に護られているような気持ちがした」。それから彼はベッドから一飛びに火のところに走って体と心を暖める。このように点火してベッドに戻り、最後に炎のところに行くために、彼は「三度、歯をがたがた言わせながら」部屋を横切り、「極地探検でもするような気持ちを味わった。」それは「砂漠を横断して、幸福の港へと向かう」ことであって、彼には「実に一大冒険だったのだ。」この「睡眠と、火と、砂漠」は「三つの異なる地方、異なる文明」だった。最初は「母の胸にとりすがらる幼児の大切に保護された肉体」が、やがて「苦しむために作られた兵隊の肉体」となり、それから「火という文明の歓びを享ける大人の肉体」になる。火は単に文明の利器というのではなく「客人、同僚に敬意を表す」もの、祝祭の歓びなのである。

したがってベッドから寒さの砂漠を経て炉へという動きは、保護される＜子供＞から友愛の＜大人＞へという、人間の精神的成長、拡大を示すものにほかならない。こういう成熟のために「砂漠を横断すること」を、彼は「真の冒険」と呼んだ。冒険においては、砂漠を越えれば祝祭がある。しかし、今向かっている犬死同様の任務に「冒険」はなく、「あるのはただ絶対的な空虚だけだ。」たとえ瀕死の危険を冒しても冒険には意義があったが、今は虚無の死に向かって進むだけなのだ。

さて第四は、機上から眼下を見てよみがえる一つの思い出である。遠い幼年時代、彼が六、七歳だった頃のこと、子供たちが寝ているべき夜の八時頃に、彼は温かい子供部屋から廊下に忍び出たことがある。大きな田舎家の一階の「途方もなく広い」廊下が、彼にはいつも怖かった。廊下は寒く、真ん中あたりに小さいランプがあって薄ぼんやりと暗がりを照らしており、ひっそりとした中で板壁が音を立ててはぜていた。こっそりと「世界探検に出かけた」ものの、彼は恐怖から深入りしかねて、卓に登って座り込む。すると応接間のドアが開いて、二人の叔父が出てくると廊下を歩き始めた。「この二人の叔父が、僕にはふだんから非常に怖ろしかった」ので、「見つかると思ってぶるぶる震えていた。」二人は廊下を行きつ戻りつしながら現代の世情を論じていた。彼にはそれは「大人の秘密」、「秘められた宝物」を運ぶ潮のように思われた。それは「星の運行のような規則正しさ」で繰り返される潮であり、「永久的なものの味わい」があった。幼い子供の心にそれは「海の広さよりもなお寓話的な何物かを静かに築き上

げてくれ」,そこには貴重な「拡がり (l'étendue)」があった。(P92) 今飛行する彼は「一万メートルの上空から一州ほども広い土地を俯瞰する」のだが、それよりもあの子供時代に味わった空間の方がずっと広がったと彼は言う。

サンテクスは四歳で父を失ったが、愛情深い母と兄弟姉妹たちとともに非常に幸福な子供時代を過ごした。それは厳しい父親の不在と、優しい母親と一族の保護のゆえに、彼にとってひたすら温かい「孵卵器の温暖な平和」であったにちがいない。しかし一方で、社会への導き手である父親がいないため独力で出ていかねばならず、暖かい家庭の庇護と外界の荒波との隔たりは一層強く感じられただろう。未知の世界に続く「廊下」が怖ろしく同時に「途方もなく広い」のは、そのためでもあっただろう。人は誰も子供時代から出て行くのだが、しかし彼が幼い時のあの広い廊下が、一体なぜ死地に向かう今の進路に繋がっているのか。傍点部からも明らかなように、ここに繰り返し現れる子供時代から死の危険へ向かうシーンは何を意味するのだろうか。

死の危機に晒される時彼が保護された子供時代を思い出すのは、単なる逃避や回想ではない。人が死に直面する時、自己の無力さ、小ささはまさに幼児そのものといえる。己の死は自分の力や理解を超えた、人間経験の次元を超えたものだからだ。ただ、子供には護ってくれる親がいるが、死を前にした大人は死から護ってくれる何者ももたない。子供は親の胸にすがすが、大人は何にすがり何に向かって自己を委ねればよいのか。このとき過信していた自分の能力、強さ、知識は落剥し、人は幼児のように素裸になって自分を委ねうるもの、受け止めてくれるものを求めざるをえない。人間は例外なくいずれ死ぬのだから、庇護から出て死に直面するサンテクスの状況は実はあらゆる人間に当てはまる。ただ人は日常自らの死から目をそらし考えないでいるが、目前に死を突きつけられたサンテクスは、否応なく死と向き合わざるを得ない。したがって彼のこの体験は死すべき万人にとって貴重な資料となりうる。

2. 死に直面するとき

航空開拓時代の飛行士は死ぬ確率が高かった。多くの同僚を失い、またサンテクス自身九死に一生を得る事故が多かったから、彼が以前から死に関心を持っていたのは当然である。本書でも彼は間一髪で死を免れた人々の話を記し、人間が死に直面したときどう感じるかを述べている。たとえば空中戦で自機を撃ち落された同僚サゴンが、「十秒間は自分でも死んだものと思ひ込んだそのとき何を感じたか」というと、彼は飛び降りるときの状況と技術に意識を集中していたため「欲望も・・・何も感じなかった。」(P55) そのため却って十分時間があるように感じられた。死に直面したとき感じると一般に信じられている切迫した焦燥感はなく、意外にもいつもの彼がいて、ただ一瞬時間の外にいるような気がしたのだった。またサンテクスは、空中魚雷に破壊された家の下から一人の男が数日後に救出されるのを目撃した。男はそのときどんな気持ちだったか聞かれると、「心配だった。長い時間だった。体が痛かった」といったことしか言わなかった。人々が尋ねたのは、死を前にして「君はそのとき何者だったか、何が君の中に現れたか」ということだったが、死に直面したからといって、全く新しい人間が出現

するわけでも世界が一変するわけでもない。「平凡な一坑夫の死の中には平凡な一坑夫の死があるだけ」だ。人は生きてきたように死ぬのである。

死に隣接して突然の天啓を得ると思われるような場合もあるが、「天啓というのは徐々に準備された道の『精神』による急激なヴィジョンにはかならない」と彼は言う。(P60)「この緩慢な準備」こそ生きるということであり、「生きるということは徐々に生まれることだ。」彼のいう冒険、つまり子供時代のまどろむ温もりから、苛酷な砂漠を通して連帯の「火」に辿り着く道程、それが「緩慢な準備」、「生きるということ」、精神的成熟である。人はその準備の度合いに応じた死の直面の仕方をする。死に臨んで自分が築いてきたものが現れるのである。ある人が死ぬときに不可視の壮麗な建築が出現するとすれば、それはその人が「目に見えない建築のためにせっせと重い石材を運んで」生きてきた者だからだ。それが人間は生きてきたように死ぬということである。ではサンテクスはどのように生きてきたのか、そしてどのような死に向かっているのか。

もう一度幼時の記憶のあの広い廊下に戻ろう。「幼年時代、僕らがてんでにそこから出て来た、あの偉大な領土！僕はどこから来た者だろう？僕は自分の幼年時代から来た者だ。僕はあの国の者だと同じく、幼年時代の者だ。(Je suis de mon enfance.)」(P90) 前作『人間の土地』でも、単独飛行中にサハラ砂漠に墜落し切迫する死の危険にあるとき、彼は我が家を回想して、「僕はこの家の子供だ」と、子供時代の広大な愛の記憶に支えられる。本書においても幼年時代の家は「海の広さよりもなお寓話的なもの」「広がり感覚 (le sentiment de l'étendue)」を彼に与えている。その「幼年時代の者」であるとは、彼が一貫して広がり (l'étendue) を希求してきた者だという意味だ。今無意味な死という不可視の壁を前にして彼は「広がりに対する渇き (aspirations)」を覚え、それこそが「あらゆる人間のあらゆる憧憬の共通の尺度」(P93) であると言う。「ある偶然が人間の心に愛を目覚めさせると……この愛が彼に広がり感覚を引き起こす。」たとえば何か危機が迫るとき突然人々は連帯感に目覚め、今生きていることの計り知れない価値に気づく。一人が全体と結びつき、一瞬が永遠に繋がる。「感動は、広がり感覚なのだ。」確かに深い感動を考察すれば、広がり感覚が含まれていることがわかる。ウィリアム・ジェームズに始まり、マスローからミンデルに至るまで、多くの心理学者によって日常次元を越えた覚醒的な広がり研究されていることは、その重要性を示すものだろう。

サンテクスによれば、その広がりとは視覚的なものではなく「精神にのみ与えられる。」「一文明とは……人間に彼の内的広がりを示してくれる幾多の世紀を通じて徐々に蓄積された、信念と、習俗と、知識の遺産である。」(P93)「幼年時代の家によって与えられた広がり、オルコント村のあの僕の部屋によって与えられた広がり」、音楽、詩等芸術によって与えられる広がり——広がりとはすべて「尊い財宝」であり、「文明のみが与え得るもの」なのだ。その文明が、今崩壊しつつある——ナチスが台頭し、「フランスが蹴散らされた蟻の巣さながらの混乱を来たしている今。」(P95) 村落は破壊され、火災は蔓延し、祖国は「巨大な不秩序」と化している。人々は立ち退きを命じられ、我が家、我が村を打ち捨てて、行く手も知らず流れてとどま

らないシロップのように道路を移動していき、村は無残な廃墟になる。平和なときは人々はどこに何があるかちゃんと知っている。一切のものは収まるべきところに収まり、誰がどこにいるかわかっていて、人は「世界に身の置き所がある。」「樹木のように」それぞれが「自らより大きなものの一部分をなして」いる。(P98) しかし今人々は「自分の家の永久性を信じることを諦めて」、幾世紀も存続する村落を、親代々からの家を、わけもわからず立ち退いていく。「今や、住むことは終わったのだ！」(P100) 彼のいう「住む」ことは平和を、文明を、したがって「広がり」を可能にするものだ。脱出することでは「広がり」を得られない。「広がり」とはどこかに逃れて「見出すもの」ではなく、住んで「築くもの」だからである。(P94) 「住む」とは単に一箇所です生活するという意味ではなく、定住や移動にかかわらず、自己よりも大きなものの中であって自他の存在を肯定することであり、永遠の中で「意義と所を得る」ことである。時間と空間を通して継続する何かにコミットし自己を預けることであり、つまりは存在の意義、生きる意味にはかならない。

住むこと、平和、文明、広がり、の生みの親であった祖国は、今醜惡な崩壊の只中にあるのだが、しかし「君が愛する女が、トラックに轢かれた場合、君は彼女の醜態を批評する気になるだろうか？」と彼は問いかける。(P125) フランスは「全世界が協力もせず戦いもせずに審判役に回った以上自ら轢死を買って出る役割」を、失敗と決まっている「遅すぎた抵抗の第一歩」を実行した。敗北がわかっているこの戦争は実行面では馬鹿げていても、やらざるをえない意義があった。フランスがそれを引き受けたので、「僕は死を甘受しているのだ。」(P129) だから焼死する飛行士を死体が醜惡だからといって「絶対に見物人の分際で審判してなどほしくはない。」自分一人安全圏に逃れて祖国の惨状を傍観し批判することは到底できない。そう思い定めてあの「広がり」を、「尊い財宝」を可能にしてくれる「文明」のために死地アラスに向かう彼は、徹頭徹尾「広がり」を希求する者である。このようにして子供時代の廊下は今の飛行に繋がっていたのだ、と彼は理解する。

いよいよ高度七百メートル、全軍団の掃射を浴びることになる地帯に入っていく。それは射撃というよりは「一つの胡桃を千本の棒で叩き落させるようなもの」であり、まず生き延びる見込みはない。そのとき彼は「最も遠い昔の思い出」である「ポーラという名のチロル生まれの家庭教師」を思い出す。彼が物心つく前に彼女は故郷のチロルに帰ったが、彼女から手紙が来ると母が読んで聞かせ、返事を書かせた。「彼女を知らないため、それは幾分お祈りに似ていた。」母を通して美しい愛の思い出となったポーラに彼は呼びかける。「ポーラよ、敵が打ち出したそうだ。」「ポーラよ…僕、少しも怖くなんかないよ。少し悲しいだけさ。」しかしいよいよ射撃が激しくなり、「この野辺一円が一拳に活動し始め」、一帯が武器の光の洪水、「厚い槍襖」となったとき、「何でも知っているポーラ」、「少年時代まで記憶を辿り、絶大な庇護の下に身を置いているというあの気持ち」は吹き飛んでしまう。「大人のための庇護はなかった」のだ。(P142) すべての防御物を奪い取られ身一つとなって、砲弾の爆発に機を揺さぶられながら、彼は死に直面——というよりもいわば死の真っ只中を飛んでいた。

3. 自己よりも広大なもの

弾片が当たれば機体も肉体もずぶりと貫くであろう無数の衝撃が続き、あと十秒生き延びるか、あと二十秒かという状況で、彼は驚いたことに「肉体なんかはどうでもいいのだ」ということを発見した。それまで彼は「身を置く観点は必然的に自分の肉体のそれだった。…自分は肉体のことを、これが自分だと呼んだ。それなのに、忽如として今この幻影が崩壊する。」(P150) たとえば自分の息子が焼死しかかっていたら、誰でもわが身の火傷もかまわず救出しようとするだろう。そのときあんなに大切にしてきた肉体が一向に惜しくないことに気づくだろう。「君は、君の行為そのものの中に住む。君の行為、それが君なのだ。」(P151) 君は「息子の救出」であり、「身をもって換えるのだ。」肉体は「道具」にすぎず、重要なのは行為、「息子の救出」だ。そのとき「君というものの意味がまばゆいほどはっきりと現れてくるのだ。」たとえ君が死んだとしても、「自ら廃したわけではなく、紛れた」のであり、「失われたのではなく、自分を見出したのだ。」それは異常な意識状態でも「モラリストの夢想」でもない。「ありふれた真実、日常の真実」なのだが、人は普段はそれが全くわからず、肉体を自分と思っている。そして生死にかかわる火急の事態が生じて初めて真実がわかる。「肉体を返却する時になって初めて、いかに肉体にわずかの執着しかもっていないか」を知るのである。

彼は十六歳のとき「これについての最初の教訓を受けた。」弟の一人が病気で亡くなる直前に彼を呼び出したときのことだ。急いで行くと弟は普段と変わらない声で「死ぬ前に言っておきたかったので来てもらった」と言った。そのとき神経発作が起きて弟は痙攣し始め、手で「否」の身振りを繰り返した。死を拒んでいるのかと思ったが、発作がおさまってから弟は説明した、「怖れることはないんだよ。僕は苦しくはないんだから。…ただ体は発作を止めることができないだけなんだ。あれは僕の肉体がやっていることなんだ」と。そして用向きを告げ、遺言によって彼は兄に自分の宝物、蒸気発動機と自転車と騎銃を誇らしげに委託した。弟はもうすぐ去る自分の肉体をすでに他者とみなしており、彼自身は肉体ではなく、「この世を去るにあたってもっとも大切なものを兄に与える」という行為そのものであったのだ。同様に死を前にして今サンテクスは理解する、「人は死なない」ということを。死を怖れるだろうと想像していたが、「死に直面する時に及んで死はすでに存在しないのだ。」なぜならそのとき人間は死んでいく肉体ではなく、人に対する「愛の行為」になっているからである。「肉体が崩れる時、初めて本心 (l'essentiel本質) が現れる。人間は絆 (relations) の塊だ。人間には絆ばかりが重要なのだ。」(P154) 換言すれば、真の絆が欠如しているとき人間は死を恐れるということになるだろう。

さて、爆撃の連続の中で、彼は「僕らがまだ生きているとは考えられないことだ」と驚きつつ、衝撃の驚愕と安堵以外に何も感じる暇がなかった。「理屈からいうとまず衝撃の驚きを、次に恐怖を、次に安心を感じるべき」なのだが、実際は「驚きと安心」のみで恐怖を感じる時間がないのだった。まだ生きている、まだ生きている、「僕は、一秒毎に、勝利者だ！」次第に彼は「一種の歓喜の連続の中に生きていた。」それは生きているという素晴らしい実感、「生命が一秒毎に与えられるような」、「僕の生命が、一秒一秒よりはっきりと感じられるような」、

「生命の三昧境」であった。(P156) 死を覚悟し既に肉体を手放して初めて、逆説的にも一瞬一瞬の生命が光り輝き、彼は強烈な歓喜に圧倒される。しかしこれもまた何ら異常事態でも特殊なことでもなく、実は「日常の真実」なのだ。本当はあらゆる人間にとって生きている刻一刻が貴重であり歓喜なのだが、平素は慣れてしまい無感覚になっていて、いざ肉体の死が目前という火急時までその真実に盲目なのである。今その目隠しが吹き飛んでサンテクスは、生命は愛と絆にほかならないことをはっきりと理解したのだった。

奇跡的にもついに死地を脱した彼の心にこみあげてきたのは、「美しい愛情 (la belle tendresse)」であり、「わが家へ帰っていく」気持ちである。「そうなのだ。僕はわが家へ帰るのだ。2-33隊は僕のわが家だ。僕にはわが家の人々の気心が解っている」と、彼は「わが家」という語を繰り返す。(P164-5) もちろん「わが家」とはまさしく「住む」所であり、このとき彼ははっきりと「住む」者となる。前章で述べたように、「住む」とは時間空間を越えて自己より大きなものに帰属すること、存在の意義にほかならない。「僕は存在するためには参加を必要とする」という彼は今や揺るぎなく「存在」している。任務に自己の肉体生命を、「与えう一切のものを与える」ことによって、「参加する権利」、「結びつく権利」、「一体となる権利」、「僕自身以上のものと成る権利」を得て、「僕は今までより一層深くわが隊の者になった。」(P168) 前に「僕は幼年時代の者だ」と述べた彼は、今「僕は隊の者だ」と断言する。彼は「幼年時代」、つまりあのオルコント村の、幼児期に似たベッドの温もりから、死の危険という「砂漠」を通り、ついに友愛と祝祭の「火」である、隊という協同体に到達したのだ。現に彼はその行程を聖地に向かう巡礼に喩え、また「大きな焚き火に向かって駆けつけるような気がする」(P196)、「自分たちはある祝祭に向かって急いでいるような気がする」(P159) と述べている。

更に重要なことに、彼の「わが家」は隊にとどまらなかった。「わが隊の者はこの国の者」だからだ。宿の主の農夫が帰ってきた彼を夕食に招きパンを分け与えたとき、「自分が彼らを通してフランス全体に結び付けられている」ことに彼は気づく。このパンが育まれた麦畑を思えば、「実った麦の上を渡る風が海の上を吹く風より一層豊満に見える」(P181) のは祖先からの伝来の土地を、代々の精神的遺産の上を吹いているからだ。こうしたパンは身体のみならず心の滋養物であり、この農夫一家の和やかさ、愛、美であり、精神的な「光」である。それが危殆に瀕している今、彼は「あれら目には見えない財宝の責任が自分にある」、「僕は彼らのものだ、ちょうど彼らが僕のものだと同様に」と確信する。(P183) だから「フランスの敗北がどんなに自分の屈辱であるとしても、その連帯責任を担い」、それをわが身に引き受けようと決意する。そのとき「自分が他のフランス人を責める気がしなくなったと同様に、フランスもまた世界の責任を問うべきだとは考えなくなった。各自に全人員の責任がある。だからフランスに全世界の責任はあったわけだ。フランスは…世界を一致させる共通の尺度を提供することもできたわけだ。」共通の尺度とは無論、感動の根源である「広がり」、愛を意味する。

それなのに、僕らはその務めを怠ったのだ。各自に全人員の責任がある。…各自にだけ全人

員の責任があるのだ。僕は初めて今、自分のものとして引き受け得る文明のよって来るところの宗教の神秘の一つを理解し得た。それは「人間の罪を負う…」ということだ。各人が、万人のすべての罪を負うのである。(P191)

読む者を肅然とさせるこの言葉に、人は思い浮かべるだろう、人類の罪を十字架と背負い、「神よ、彼らを許したまえ、彼らはその為す所を知らざればなり」と言ったキリストを。サンテクスは己の肉体の死を直視して、自らの否定しえない実感により「子供時代の者」から「隊の者」、「フランスの者」に、さらに「万人の者」になったのである。「広がり」を追求してきた彼にとって、これ以上の「広がり」があろうか。

万人に対する心の広がりを体験した彼は「あらゆるものが僕の心に響き入る。…一切が僕の内部で行われているような気持ちだ」と感じる。(P195) 存在の根底まで感動するようなとき、人は世界と自分の境界が消失したごとくすべてが生き生きと感じられる経験をする。彼はそれを「アラスの砲火が殻を破ってくれたのだ」と言う。死の衝撃により個人という殻が破れて広がった彼にとって「個人は道でしかない。」敗北や崩壊を個人のせいにしても無意味だ。個人は「通路であり路地であるに過ぎない」のだから。重要なのはその道を通る「真人間 (l'Homme)」である。(P193) 「真人間」とは個々の「人間 (homme)」や「集団 (la Collectivite)」のことではない。それは大聖堂が石材や石材の総量でないのと同じだ。「個人を超越した真人間」こそ「この民族と僕との共通の尺度」であり「民族と種族の共通の尺度」である。人間が互いに尊敬しあう根元はこの「真人間」であり、それは内部神性、彼の言葉を借りると、人々が人間のうちに尊ぶ「神」である。(P200) したがって、彼がいうところの「真人間」は、個人を否定する独裁政治、全体主義、熱狂的民族主義等とは全く異なり、あくまで人間全部を含む普遍的なものであることはいうまでもない。

彼が一貫して求めてきた「広がり」とは、種子が樹木に成長するように、本来そうあるべき存在、天与の「本然 (Être)」への自由であり、人間に内在する「真人間」の上昇であった。(P204) 自分が戦死するとすればそれは「この本然に自己を施与する」ためだ。これは彼が希求した「広がり」の究極だった。しかしそれは「参加しなければ見えない」ものだった。彼はわかりやすい例を次のように述べている。「ひとつの地所のいかなるものかを理解できるのは、それを救わんがために奮闘し…そのために自己の一部を犠牲にした者に限るのだ。これでこそ初めて、彼の心に地所に対する愛情が生まれ出るのだ。一つの地所は決して利益の総計ではないのである。」(P208) その地所に献身し自己を与えることによって、人は地所を理解し愛し、地所を含む世界にまで自己が広がり、心からの充足を感じるのである。与えることなしに取ることを、利益ばかりを考える現代人が最も忘れかけている真実として、この言葉は私たちの心を打たないだろうか。この「地所」は単に一区域ではなく、現在では地球となり人類協同体となっていることは明かだ。死を潜り抜けて彼は、それを身をもって実感したのだ。同僚や宿の主一家を通して見えたある種の光、つまり「真人間」という「自己よりも広大なもの」に対する愛のために、人は生き、そのために死に得るものであると。このようにして、庇護してく

れる親に無心に頼る子供時代から、死の試練を経て、彼は自己を委ねうる最終的「広がり」を見出したのだ。

4. 武士道とは

サンテクスの言葉が感銘を与えるのは、それを彼が身を挺して実行したからである。自分は安全圏にいながら他人に「～のために命を捧げよ」と言うドグマやイデオロギーではなく、自分の経験と正直な実感から、まず自らが他者のために矢面に立ったからである。「犠牲は…ひとつの実行だ。それは人が頼ろうとするその『本然』に対して自己を施与することだ」(P208)という彼の言葉は、奇妙に「武士道といふは死ぬことと見付けたり」で知られる『葉隠』を思い出させる。事実、『戦う操縦士』の後で偶然に小池喜明氏の『葉隠——武士と奉公』を読んだ私は、両者に予期せぬ共通性を見出して驚かざるをえなかった。山本常朝の『葉隠』、次いで新渡戸稲造の『武士道』を読み、自然と武士道に関するものに注意するようになったころ、急に世の中で武士道が流行し始めた。だが「武士」、「武士道」の意味があいまいなまま使われている場合が多いので、ここでごく簡単に意味・内容を考察しておきたい。

合戦のプロである「つわもの(兵)」, 官人・貴族の警護に当たる「さぶらい(侍)」, 武力で奉公する「もののふ(武者)」は、次第に総称して武士と呼ばれるようになったが、「武士」が武力をもって公権力に仕える者という意味になるのは十世紀以降といわれる。新渡戸によれば武士道というある種の精神的規範ができ始めたのは、大体源頼朝の制覇、十二世紀末頃で、いわゆる武士道がほぼ定着したのは十六世紀という。また勝つことが第一であった戦国時代の武士道と、『葉隠』(1716年)のように安定した組織に仕える徳川時代の武士道とは相当に異なるものがある。小池氏はその点について「武士道といふは死ぬ事と見付けたり」で始まる有名な項が、「常住死に身になっているときは…一生落度なく家職を仕とおすべき也」で終わっていることを指摘し、趣意は「死ぬこと」ではなく「奉公」であり、武士道というより奉公人道であると強調される。(HK151) 戦乱の世において武士が己を懸ける目的は明白であるが、武術が無用となる泰平の世においては武士はその存在意義を失い、保身と享楽に堕す者も多く、どうすれば武士が意味のある人生を送りうるかが問われた。そこを逆手に取って「奉公」に命を懸ける武士道を主唱した山本は、単なる理論ではなく己の体を張ってそれを真摯に生きた。小池氏も「葉隠の魅力は…この心意気にある」(HK34)と述べておられる。確かに『葉隠』は、校訂者古川哲史氏が「どこを切っても鮮血のほとばしるような本」と評したように、全般に熱烈なトーンで、時代背景を異にする現代人には共感しがたい内容もあるが、その誠実にして真摯な生き方には大きな感銘を受ける。

一方、英語で『武士道』(1899年)を書いた新渡戸稲造は、封建体制に形成された武士精神が実際に生活の中にまだ生きていた最後の世代であり、「日本人は宗教教育がないのか(道徳教育がないのか)」と衝撃を受ける欧米に向かって、「日本人の精神の支柱は武士道であり、それは世界に誇りうる普遍的価値を有する」ということを説明するために本書を著した。従って歴史的に特定すべき武士道ではなく、彼の時代の人々を支えたそれまでの日本精神の集大成、

文中の言葉を借りるなら「大和心」、副題の言葉を使えば「the soul of Japan」といってよいであろう。しかし本書および歴史にも見るとおり、鎌倉時代以後日本を事実上支配し発展させてきたのは武士階級であり、その武士道的価値観は庶民にも相当に浸透していたので、「大和心」「日本の魂」の重要部分を武士道で説明するのは事実には則しているといえる。

鈴木大拙もまた英語による名著『禅と日本文化』（1938年）において、禅は直感的な理解方法によって「人を生死の羈絆から解こうとし」（Z37）、「危機に瀕した時は…現状打破の革新力となる」ゆえに、武士道に深い影響を与えたと述べている。武士道は「常住死を覚悟すること」「わが身を誇示せず社会同胞のために深情を尽くすこと」（Z46）を徳とする、と彼も言うところ、『葉隠』のいう「死ぬこと」は煎じ詰めれば「よく生きること」と同義である。大拙は『葉隠』でしばしば言及される「死に狂い」、「狂気」は、「意識の普通の水準を破ってその下に横たわる隠れた力を解放することだと看破して、「無意識状態が口を切られると、それは個人的の限度を超えて立ちのぼる。死はまったくその毒刺を失う。武士の修養が禅と提携するのはじつにこの点である」と書いている。（Z46）大拙によれば「潔く死ぬ」ということは日本人の心に最も親しい思想の一つであり、「潔く」とは「悔いを残さずに」「明らかな良心をもって」「勇士らしく」「ためらうことなく」「落ち着き払って」の意味で、「とくに武士の仕方で鍛錬されていない…庶民の間にまで」広がっていた。（Z61）勿論この「潔く死ぬ」が、実は死ではなく最高の生き方の美学であったことは言うまでもない。

さて、小池氏は「常住死身に成る」とは一切の「私」を捨て公に奉り尽くすことであり、「死ぬ事と見付けたり」の第一義はここにある、と説明される。（HK32）この「私を捨てる」は『葉隠』の随所に見られる。たとえば「私なく案ずる」「私を除きて工夫いたさば」（HY1-4）、「我が為にするは狭く小さく小気なり」（HY1-179）、「諫と言ふ詞はや私なり。諫はなきものなり」（HY2-128）、「何にても澄ませば済むものなり（私心を去れば万事それですむものだ）」（HY11-131）等。『葉隠』に頻出する「澄む」という言葉も「私心のない清澄性」（HK216）を意味する。絶体絶命の危機に瀕したとき、それを乗り越えるにはどうしても「私を去る」ことが必要だということを武士は体験から知っていたし、奉公においても、合戦こそないがいつ何時切腹の命が下るかわからない、死が身近にある時代であった。確かに小池氏の言われるとおり「武士道」と山本の「奉公人道」とに内容の違いはあるが、しかし共に自己の死を超え、主君もしくは大義のために「私を去る」ことを根幹とする点では一致している。

また新渡戸の『武士道』の序文を書いたW. E. グリフィス氏は、武士道に「一粒の麦地に落ちて死なずば唯一つにてあらん。もし死なば多くの実を結ぶべし」という「高き法則」を読み取っている。この「私を去る」こそ、何ものにも臆せず従容として死に臨むことを可能にする武士道の真髄といえよう。「私を去る」とはサンテクス流に言えば、肉体の自分という捕われから解き放たれて本然の自己を現すことだ。武士道に特徴的であるのは、危機に臨んでではなく常日頃から「常住死身に」成る修練をしたことである。常住「私を去る」の修練をすることは、いわゆる己を空しうして師に習う「芸」「技」「術」等、「～道」と呼ばれる日本の伝統文化に共通する特性であり、さらに深く日本文化の本質を成しているといえよう。1900年にイギ

リスに留学して西洋の個人主義を充分理解し、『私の個人主義』を著した漱石でさえ、大病後は「則天去私」に向かおうとしたのだ。では現代の日本では「私を去る」伝統はどうなったのか。

第二次世界大戦で初めて日本が敗れたとき、自分たちや肉親友人がそのために命を捨てた「君」や「国」は何だったのか、と多くの国民は呆然とした。「尽くす」「捧げる」「滅私奉公」等の言葉に人々が拒絶反応を起こすようになったのはそれからである。怪しい「公」などというものよりもまず「私」だ、自分を捧げるべきものが存在しないなら自分の為生きるしかないという考え方を、戦後の混乱とアメリカ流個人主義が正当化した。こうして当然ながら西洋の個人主義の伝統をもたない日本人の中に、自分中心主義、利己主義、ミーイズムが広まり、個々人は自我の延長である核家族に望みをかけ、ニューファミリー、マイホームの隆盛となった。しかし個々の家族を支えまとめる社会システムがないとき、各々の家庭は脆弱なものであって個人の支えにはなりえない。そこから家族崩壊、家庭内離婚、家庭内暴力、親殺し子殺し等が生じる。家族の個々人は孤立してもコンビニとバイトのおかげで「個食」し、「個立」して当座は暮らせるだろうが、真の「自立」ではないゆえに心底の安心と幸福は得られない。今、金魚鉢からこぼれた金魚のような個体主義は何の益にもならないことに、多くの人が気付き始めたのではないか。いかに奮闘してそのために生きようとも「私」、「個人」は必ず死ぬことは自明である。分断された「私」でいるかぎり死は恐ろしい消滅としか思えない。個よりも大きな存在とつながりその中に場所を得て、初めて個は生かされるのだということを人々は感じ始めたのではないか。

かつて日本にあったいわゆる「公」は、「御家」「藩」「幕府」「お上」「お国」から「村落共同体」にいたるまで、上からの一方的抑圧と局外者に対する排他性という致命的な欠点をもっていた。見ようによれば『葉隠』も不自然な自制に傾く要素があり、支配者層に悪用されれば有害なイデオロギーへと歪曲される可能性がある。復古的「公」には十分注意しなければならない。しかしサンテグスの生き方に照らされると武士道の本質的な価値が浮かび上がり、『葉隠』や新渡戸の『武士道』に見る精神が国や時代を超えて人々の心に訴えるものをもつことが明白になる。現に『葉隠』を校訂された古川氏は、1964年ハワイ大学で発表した葉隠の基調哲学についての論文が広く欧米で反響を呼んだことから、葉隠精神が現代の世界に通じうるものをもっていると確認された。実際、死を前にしても泰然とした「武士」の姿は、時代を越え国を越えて人の心を打つ。今でも毅然として筋の通った人間を「侍」「武士」と呼ぶことが多い。「弱きを助け強きを挫く」、「義を見てせざるは勇なきなり」など、武士道の根源には、私心を捨て他に尽くすという揺るがぬ姿勢がある。個人主義の弊害を痛感した現代人にとって、常日頃の私心を去る修練によって新たな協同体を見出すことが肝要であろう。

おわりに

武士道を可能にしたのは武士達の「公」であった。元来「公」なき「私」はありえず、「公」とはもともと存在するのだが、ただ人間が一時的に盲目になっているだけなのだ。「公」を顧

ない現代人はよく「個人の自由」とか、「人に迷惑をかけないかぎり何をしても自由だ」というが、サンテクス言葉を借りると「他人に関連しない実行なんか一つだってありえない。」他から切り離され独立して自由な個人というものも国も存在せず、すべては根底で繋がっている。「独りだけの個人というのは、存在しないのだ。離脱する者は、協同体を害うのだ。悲しむ者は、他人をも悲しませる」(P210)という彼の言葉は、ヘミングウェイがファシズムとの戦いを描く『誰がために鐘は鳴る』で引用したジョン・ダンの詩、「何人も島にあらず、一人にて全きものにあらず。みな大陸の一片、本州の一部なり。…いかなる人の死も我を減ず、我は人類に連なるゆえに」を思い出させる。

死が迫り、危機が迫り、個人の脆弱さ、「私」のはかなさが露呈するとき、人々の意識は否応なく「協同体」に、「公」に向かい始める。サンテクスは死を潜って究極的「広がり」を得た。武士は死を覚悟し「常住死身」の鍛錬によって「私を去る」ことを学んだ。現代人は二十一世紀に頻発する大規模な災害、戦闘、極度の環境悪化等、地球的危機に気づいて、利己主義から脱却し、非抑圧的で自発的な、新たな「公」を、人類協同体意識を徐々に得ていこう。そのとき「常住死身」「私を去る」の修練の伝統をもつ日本は、地震・津波対策において世界に役立ちうるように、私心を捨て全体の調和を図る精神と生き方において世界に貢献しうる。武士道の普遍的価値が生かされるとすれば、このような意味においてであろう。

(註) 引用文の後の()内のアルファベットはそれぞれ次の文献を、数字はページ数を示す。

P: 1) HY: 2) HK: 3) Z: 6)

引用文献

- 1) Saint-Exupéry A : Pilote de Guerre. France, Gallimard, 2003.
- 2) 山本常朝(和辻哲郎・古川哲史校訂)：葉隠、東京、岩波書店、2004.
- 3) 小池喜明：葉隠—武士と「奉公」東京、講談社、2002.
- 4) 新渡戸稲造：BUSHIDO : The Soul of Japan. 東京、講談社、2004.
- 5) 新渡戸稲造(矢内原忠雄訳)：武士道。東京、岩波書店、2006.
- 6) 鈴木大拙(北川桃雄訳)：禅と日本文化。東京、岩波書店、1964.